

稻荷

ワキ 和泉式部従者

シテヅレ 小式部

シテ 恋慕者の亡霊

地は 京都

季は 秋九月

「かやうに候ふ者は。都和泉式部に仕へ申す者にて候。さても和泉式部過ぎにし秋の頃。稻荷にて紅葉狩の御時。時雨はげしく降りて候ふ程に。賤しき民の者の着し麻の衣を借りて御輿にかけ候ひし時。和泉式部の御姿を見申し。しづ心なき恋となりて候。かれていの者の着たる衣をば襖と申し候。此者心や有りけん。題付けて歌をよみ送り申し候。時雨せし稻荷の山のもみぢ葉の。あをかり

しより思ひそめてき。かやうに申し参らせ候へば御返事もなく候ひし程に。彼者むなく罷りなりて候。さる程に式部の御息女に小式部と申して御座候ふが。風の心地とて悩ませ給ひ候。参りて御心地をも尋ね申さばやと存じ候。御心地は何と御座候ふぞ。

「げにや大方の秋になるだに淋しきに。身にしむ風の心地して。打ち乱れたる我心。やるかたなきを

如何にせん。

地下 「げにや弱き心にも。乱るゝ物は青柳の。

地上 「糸ふく風の心して。く。夕暮の空くもり。雨さ

へしげき軒の草。傾く影を見るからに。心細さの
夕べかな。く。

ワキ詞 「是はかの歌かけたる者の執心かと存じ候ふ程に。

仏事を執行し諸を弔ひ申さうずるにて候。

シテ 「面白や頃は長月廿日あまり。さながら錦をかざる

鸞輿属車の。色々かはる貴賤の道の。行きかふ袖
の面白さよ。げにや都の四方のけしき。何くはあ
れど殊になほ。時を知るから折からに。色に稲荷
の紅葉の山。杉の木の間の村紅葉。是を物見と稲
荷山の。

一声 「滝の白波朱の斎垣。

地 「神さびわたる宮居かな。

ワキ詞 「不思議やなそことも知らぬ方よりも。化したる人

の見えたるは。如何なる者ぞ名を名乗れ。

シテ「何と名を名乗れと候ふや。」

ワキ「中々の事。」

シテ「我はかく賤しき賤の自ら。何か心のあるべきなれども。思ふ心の種となるを。言葉の花の色ぞとも。思ひ給はぬ涙の露と。消え失せし身の行方をば。夢路に帰り来りたり。」

地「さて狂人は忘れめや。我は忘れずその頃は。雲井

の月の影たかき。都の秋の暮つかた。紅葉に通ふ村時雨。山路の秋を惜しむとて。

クセ「車を並べ輿をつゞけ。馬上歩行の異形人。道もさりあへず行きちがふ。貴賤僧尼老少男女の。出立衣小袖。直衣狩衣直垂。さまざまに変われども。袖は紅葉の一枝を。折りてかざゝぬ人はなし。殊に上臈は。色ふかき御心。紅葉を友と待ちわびし。秋の来るをそなたぞと。西山もとに車を立て。霧

の晴間を見渡せば。嶺よりかつ散るは。谷の梢の紅葉なり。

シテ「名には紅葉のよもあらじ。

地「松尾嵐山。小倉の里の夕暮に。紅葉やあると尋ねれば。鹿ばかり鳴く常磐山。かはらぬ宮居秋久し。其神山の葵草。年は経れども。二葉の紅葉よも尽きじ。

シテ「あら閻浮こひしや。

地「恋しき人は梢にあり。恋しき人は梢にありけり。嬉しやあの木に上らんとて。枝にすがれば剣となつて。取る手も貫き身を通せば。念力の梢にのぼりく。て。見ればありつる人は又。我にちがひて木陰に有りけり。あら恨めしやと梢を伝ひ。おりんとすれば。枝に貫かれ梢にめぐる。こはそも何といひすて。奈落の底に沈み果てゝ。浮ぶ世もなき和泉式部。誰ゆゑぞ誰ゆゑぞ。恨めしや。さ

れども因果をひるがへし。一念懺悔に。煩惱すな
はち菩提心の。仏果を受くる御弔ひに。浮ぶ身と
なる有難さよ。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈第一輯』大和田建樹著